

ウトノアナ・ゼゼノサマ 名勝調査報告書

豊後高田市教育委員会

例 言

- 1、本調査報告書は、ウトノアナ・ゼゼノサマの意見具申に伴い作成した。
- 2、国登録記念物（名勝地関係）への意見具申に伴い、名称を「ウトノアナ・ゼゼノサマ」とする。
- 3、ウトノアナ・ゼゼノサマについて、平澤毅氏（文化庁文化財第二課）、山路康弘氏（元大分県教育庁文化課）、齋藤圭氏（別府大学講師）にご指導、ご助言をいただいた。
- 4、本調査報告書の編集は豊後高田市教育委員会文化財室の松本卓也が担当した。
- 5、本調査報告書に使用した現況写真は、豊後高田市・豊後高田市教育委員会が撮影したものを使用した。航空写真については豊後高田市のG I Sに使用された写真を使用した。

目 次

第1章	ウトノアナ・ゼゼノサマと周辺の環境	
第1節	自然的環境	4
第2節	歴史的環境	5
第3節	民俗的環境	5
第3節	社会的環境	6
第5節	これまでの研究	7
第2章	ウトノアナ・ゼゼノサマの内容と価値	
第1節	ウトノアナ・ゼゼノサマの風致景観に対する評価の歴史的変遷	9
第2節	ウトノアナ・ゼゼノサマの構成要素及び周辺の要素	10
第3節	ウトノアナ・ゼゼノサマの価値	12
第3章	ウトノアナ・ゼゼノサマと豊後高田市	
第1節	名勝としてのウトノアナ・ゼゼノサマの意味	13
第2節	保存活用について	13
参考文献・資料		14
資料編		15
【図版】		16
図1	ウトノアナ・ゼゼノサマの対象地域の位置を示す図面	
図2	田染地区大字図	
図3	田染地区村境概要図（江戸時代）	
図4	ウトノアナ・ゼゼノサマ周辺小字図	
図5	ウトノアナ・ゼゼノサマ周辺の要素の位置図	
図6	国東半島県立自然公園の規制の範囲	
図7	ウトノアナ・ゼゼノサマ範囲図（地形図）	
図8	ウトノアナ・ゼゼノサマ範囲図（公図）	
図9	ウトノアナ・ゼゼノサマ範囲図（航空写真）	
図10	島原藩領田染組村絵図（熊野村）	
図11	島原藩領田染組村絵図（田野口村）	
【ウトノアナ・ゼゼノサマに関する文献等】		26

【現況写真】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27

- 写真1：ウトノアナ・ゼゼノサマ 遠景
- 写真2：ウトノアナ・ゼゼノサマ 遠景
- 写真3：ウトノアナ・ゼゼノサマ 遠景（熊野社会館より）
- 写真4：ウトノアナ・ゼゼノサマ 遠景（ドローン写真）
- 写真5：ウトノアナ・ゼゼノサマ（ドローン写真）
- 写真6：ウトノアナ（ドローン写真）
- 写真7：ウトノアナ・ゼゼノサマを北側から（ドローン写真）
- 写真8：ウトノアナ内部（ドローン写真）

【古写真】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

- 写真9：田染耶馬

【参考：登録区域外】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 32

- 写真10：熊野磨崖仏
- 写真11：鬼が築いた石段
- 写真12：熊野社
- 写真13：胎蔵寺
- 写真14：橋本庚申塔
- 写真15：ホラガ石

第1章 ウトノアナ・ゼゼノサマと周辺の環境

第1節 自然的環境

○地理・地形的特徴

ウトノアナ・ゼゼノサマは、豊後高田市南部に位置する田染平野に所在する、形状や色の特徴から名の付いた岩峰群である。

国東半島でも田染地区は国東半島の付け根に位置し、大分県北部に特徴づけられる凝灰角礫岩質の火山砕屑堆積物（新生代第三紀・古期宇佐火山岩類の火山砕屑岩）と、両子寺の火山岩類（新生代第四紀州）による岩石が田染盆地を挟んで分布している。ウトノアナ・ゼゼノサマが位置する岩峰群は、古期宇佐火山岩類の火山砕屑岩からなる屹立する岩峰群が形成されており、古くから田染耶馬の1つとして紹介された（ウトノアナ・ゼゼノサマがある熊野の耶馬、田染上野の鍋山、田染真中・田染小崎の間戸ン岩をまとめて田染耶馬と呼ばれていた）。

ウトノアナ・ゼゼノサマのある岩峰群は、熊野磨崖仏附近を源流とする熊野川の侵食を受け、屹立する岩峰の高さは40～50メートル、熊野集落の入口からは90～100メートルほどの高低差を生み出す岩峰が形成された。江戸時代の村で言えば、熊野村と田野口村の境となっており、この岩峰群が2つの谷の往来を妨げていた。

ウトノアナ・ゼゼノサマのある岩峰は、古期宇佐火山岩類の火山砕屑岩に分類される岩峰に位置しており、周囲は奇岩と言われるほど不規則な岩峰群が並んでいる。同地質では水平の層理構造が見られ、その成分により、岩峰中の特徴が生まれている。

ウトノアナ（洞の穴）は、その名の通り、岩峰の見えやすい位置に大きな穴が開いている。角礫が少なく、比較的軟らかい層が早く侵食されることで、岩峰の中心がえぐれたものと考えられる。いつ頃崩壊したものかは分からないが、江戸時代の熊野村絵図には描かれている。

ゼゼノサマは、中世には「赤岩」と呼ばれていたと推定されるが、岩峰の上部に赤く染まった部分がある。火山性の岩峰が形成される中で、鉄分などを多く含む岩石の層がたまたま露出したものと考えられている。国東半島では別の場所でも、この局所的に赤い地層を岩峰の中にみることができる（豊後高田市野添の岩山など）。

ウトノアナ・ゼゼノサマの麓を流れる熊野川は、そのまま谷を下って、馬城山と喜久山の間を抜けるルートを通して、田染真木で桂川と合流する。熊野地区は谷が深く解析谷となっており、川沿いに棚田が形成されている。

○周辺の植生・動物

大分県の中でも国東半島は瀬戸内型気候域・旧火山地帯の植生が見られる。周防灘^{すおうなだ}に面した地域は、年平均気温15℃、年間降水量は1500～1600mmで夏季の雨量は少ない地域である。冬季は周防灘を吹き抜ける冬季北西季節風の影響でしばしば降雪をみる。

ウトノアナ・ゼゼノサマ周辺はほとんどスギ・ヒノキの造成林であるが、岩峰の付近のみイワシデ群落となっており、国東半島の急崖地に植生するイワシデ、イワヒバなどの植物が着生している。

第2節 歴史的環境

ウトノアナ・ゼゼノサマが所在する田染平野（東側は旧熊野村・西側は田野口村）は、豊後高田市南部の田染地区の南部に位置しており、それぞれ細い谷間の土地に集落が開かれてきた。熊野村は熊野磨崖仏や中世・今熊野寺の坊集落として成立した集落で、田野口村は江戸時代前期には上流の溜池を使って農業が営まれてきた。

古代の田染地区は国東郡田染郷に位置しており、平安時代後期には宇佐神宮の根本荘園・本御荘十八箇所の1つとして田染荘が開かれた。

熊野村の南東部には、岩峰をつかって造顕された熊野磨崖仏（伝大日如来像は11世紀の造顕）を中心に、六郷山寺院の行場が開かれていった。伝大日如来像は、大分県内でも最も古い磨崖仏として知られるが、石造仏教美術としても国東半島では最も古い象徴的な場所となっている。その後、12世紀頃に造顕されたとされる不動明王像や、伝大日如来像の上部に彫り込まれた曼荼羅については、六郷山独自の文化に加え、熊野信仰を中心とした山岳仏教・修験道の融合した文化の流入が見られる。熊野磨崖仏の存在自体は、安貞2年（1228）にまとめられた六郷山寺院の目録である『六郷山諸勤行並びに諸堂役祭等目録写（安貞の目録）』に「大日岩屋」「不動岩屋」として登場しており、建武4年（1337）にまとめられた『六郷山本中末寺次第并四至等注文案（建武の注文）』には「今熊野寺」として記載がある。この『建武の注文』の中には、今熊野寺の西の四至「赤岩」として登場しており、この頃の四至が近世の熊野村の範囲のベースになったと考えられる。岩の色味の特徴から「赤岩」はゼゼノサマのことで推定され、古くからランドマークとなっていたことが分かる。熊野集落においては、僧侶の身分の者が居住する坊集落として展開したと考えられ、南北朝時代には入会墓地（熊野墓地）が形成され、近世にかけて石造文化財が集積されてきた。

一方で、田野口村については、中世の荘園史料には登場しない地名であるが、江戸時代の「島原藩領田染組村絵図【県指定有形文化財】」には田野口村として登場している。この村絵図は中世から近世にかけての田染地区の状況や景観を知る資料として著名で、元禄2年（1689）に島原藩の御役所に差し出した村絵図を原本として、天保7年（1836）に田染村の様子を再度調査するために地元へ送付された地図を、庄屋らが書き写したものである。地形や現在の集落の状況からも分かるが、小字・田野口の周辺が集落としての中心であり、村絵図にも登場する小字・竹ノ下の溜池や、堂（田野口堂と毘沙門堂）、田野口堂の近くにある熊野村につながる切通などは、現在にまで継承されている。

熊野村の絵図を見ると、西側に大きな岩峰群が描かれており、その中に穴が開いていることを示す丸が描かれている。この丸は、他には間戸村の朝日岩屋・穴井戸観音（ともに国登録記念物（名勝地関係））でも見られる表現であり、岩屋や洞窟などを指している。現在では、この穴の事を「ウトノアナ」と呼んでおり、村絵図からも当時からランドマークとなっていたことが分かる。

第3節 民俗的環境

ウトノアナ・ゼゼノサマに関連して、いくつかの民話や伝承が現在に伝わっている。

ウトノアナにおける大穴については、村絵図に描かれるなど地域住民には広く認知をされているもので、大穴については幾つかの伝承が残されている。

まずは、熊野磨崖仏やその前にある「鬼が積んだ石段」に関するものであり、ウトノアナに棲んでいる鬼が人を食べてよいかを権現様に尋ねたところ、熊野社まで続く急坂に、一晩で百段の石段を積むことができれば許すが、できなければ逆に鬼を食べてしまうと約束してしまう。鬼はものすごい腕力で、石段をどんどん積んでいき、夜中に権現様が様子を見た時には、既に九十九段の石段が完成しており、鬼が最後の石段を持って急坂に迫るところであった。それを見た権現様は急いで鶏の声真似をし、朝が来たと勘違いした鬼は、石を捨てて逃げ出したとされている。この時に投げた石は山に突き刺さり、隣接の立石という地名になったとされている。

その他にも、ウトノアナの大穴の中ではならず者が賭け事をしているという話などがあるが、熊野社の脇の口減らしで子どもを投げ捨てたという話がある崖などと一緒で、子どもを危ない場所に近寄らせないための禁忌の伝承であると考えられる。

ウトノアナの大穴の中もドローンで撮影したものから、安置されているものを推定すると、まずは石仏があり、姿から如意を持った地藏菩薩の立像であることが分かる。田染地区における山岳仏教等の展開として、江戸時代前期頃には日出・蓮華院（現、蓮華寺）を中心とした真言宗系の修験者の流入があり、地藏菩薩や勝軍地藏を霊場に安置している場合が多い。また、隣に安置される石祠とその中の像については、椅子に座る姿と衣装・持物の独鈷より弘法大師の像と思われる。

現在では、ウトノアナ自体の信仰の様態は分からない部分であるが、修験道などに関連する霊場であった可能性は高い。

また、熊野地区を見てみると、国東半島でも初期の庚申塔である橋本庚申塔（1624 年造立）や、参道の中にも庚申塔（三十三夜塔）が設置されていたり、庚申信仰が盛んであったことも分かる。鬼の積んだ石段に関連して、民話が普及したとも考えられる。

一方の、ゼゼノサマは善神王様（ゼジンノウ／ゼンジョウオウ）の訛った表現になっており、国東市国見町の赤根社から勧請された祠が岩の根本にあるとされている。善神王は武内宿禰のことであり、熊襲征伐のために国東半島に渡った景行天皇や、宇佐神宮の祭神である応神天皇・神功皇后など5代の天皇に仕え、朝鮮半島での戦いなどで活躍したとされる伝説上の人物である。宇佐神宮の境内社である黒男神社の祭神としても祀られており、宇佐大神を支える存在として黒男様と呼ばれ親しまれている。また、九州では筑後国一之宮である高良大社をはじめとして、武内宿禰を高良玉垂命として、高良社に祀っていることがある（田染地区にも田染横嶺に高良社がある）。主に武運などのご利益があるとされているが、伝説上のことではあるが、非常に長生きであったことから延命長寿を願うことも多い。

ゼゼノサマが近くに勧請された理由や、その後この地域においてどのような祭祀を行ってきたかは不明だが、国見町の赤根社は元々大分市の賀来社から勧請したと伝わっている。



第4節 社会的環境

現在、ウトノアナ・ゼゼノサマは、県または市の指定名勝としては保護されていないが、近代においては田染耶馬の一部として、地域から親しまれた景観となっている。

文化財以外の保護措置としては、国東半島県立自然公園（第2種特別区域・普通地域）の指定を受けている。

若干の信仰物（石仏や祠）はあるが、地目は全域が「山林」となっており、各所有者が土地を管理している。

田染地区は、高齢化・人口減少が深刻な地域でもあり、特に熊野地区において、人口は非常に少なく、今後の景観維持は大きな課題となっている。熊野磨崖仏の拝観があることで、熊野磨崖仏の拝観料徴収や、参道の安全確保などの環境維持が地元住民なども集まって行われている。

豊後高田市教育委員会では、田染荘全域をフィールドミュージアムとして活用する取組を構想しており、富貴寺、真木大堂、熊野磨崖仏、田染荘小崎の農村景観をコアサイトとしつつ、田染荘全域のスケール感や歴史的景観をスポットを増やし、周遊性を高め、コンテンツに厚みを持たせる取組を推進している。

第5節 これまでの研究

ウトノアナ・ゼゼノサマの歴史的環境・民俗的環境に関する検討は以下のようになされている。

田染荘における歴史学・文化財学的調査は、昭和56年から行われた大分県風土記の丘歴史民俗資料館（現大分県立歴史博物館）による豊後国田染荘の調査である。同調査では、田染地区に残る荘園時代の遺構や、立荘以前から昭和時代にかけての土地利用の変遷について考察がなされ、調査手法としては、日本史学以外にも埋蔵文化財や民俗学、自然分野にわたる調査グループにより、田染荘という地域を総合的に捉えようとした点も当時としては画期的なものであった。六郷山寺院における四至の検討において、

「赤岩（ゼゼノサマ）」の存在については言及があるところであるが、熊野地区については磨崖仏及び熊野墓地についての検討が中心になっており、耕地や地名、景観に関する検討はそこまで深く行われなかった。

その後、平成 26～27 年度にかけて行われた文化庁文化財部記念物課の名勝に関する特定の調査研究事業（大分県の名勝に関する特定の調査研究事業）においては、国東半島六郷山寺院に関する名勝調査が実施された。同調査では、田染地域は一定の評価を受けながらも、六郷山寺院と関連して傑出する名勝的価値がないものとして個別調査の対象から除外されることとなった。

そこで豊後高田市教育委員会では、平成 29～30 年度に文化庁の国宝重要文化財等保存整備費補助金を受けて追加の名勝調査を実施し、平成 31 年 3 月には『国東半島田染名勝調査報告書』を刊行した。

本調査では、島原藩領田染組村絵図に描かれる岩峰の位置及び絵図作成時の視点場について深い検討を加えた。それらの情報はベースマップとした森林基本図・村絵図に落とすだけでなく、緯度経度に紐づけて整理し、Google マップ上に表示ができるようにし、風致を形成する要素同士の位置関係について、より分かりやすく整理する事ができた。

また、特筆すべき風致をもつ 6 ヶ所（鍋山・喜久山・朝日岩屋及び夕日岩屋・穴井戸観音・ウトノアナ・ゼゼノサマ・西叡山）について、文献調査や現地調査（踏査やドローン撮影）を実施し、調査委員の専門領域毎にもその価値をまとめていただいた。

ウトノアナ・ゼゼノサマに関しては、危険で近寄れなかったウトノアナの穴の内部をドローン撮影によって確認することができ、石仏や石祠などの信仰物の存在を確認することができた。また、ドローン撮影によって、ウトノアナ・ゼゼノサマ一帯の岩峰群の配置や形状について、より理解を深めることができた。

本調査によって、田染地区における岩峰群の風致のなりたちや特性、荘園時代に基盤を置く風致の時代的な連続性や関連性について、新たな知見を多く得ることができた。

第2章 ウトノアナ・ゼゼノサマの内容と価値

第1節 ウトノアナ・ゼゼノサマの風致景観に対する評価の歴史的変遷

ウトノアナ・ゼゼノサマは、田染地区の熊野集落と田野口集落の間に聳える岩峰群の名勝地である。

ウトノアナの大穴は自然にできたものであり、その内部に近世に地藏石仏や弘法大師の石仏が配置されてきた。一方、ゼゼノサマの岩峰の赤くなった部分は、鉄などの成分が局所的にしみ出したものと考えられる。

○史料上に見えるウトノアナ・ゼゼノサマ

ウトノアナ・ゼゼノサマは現在の呼び名（熊野集落・田野口集落の住民より聞き取り）であり、当該岩峰については、史料上では別の名称で登場したり、絵画表現でのみ登場している。

ゼゼノサマは、建武4年（1337）の「六郷山元中末寺次第并四至等注文案」における今熊野寺の四至（西）における「赤岩」がこれに該当すると考えられている。安貞2年（1228）の「六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録写」においては、熊野磨崖仏は大日岩屋・不動岩屋となっており、熊野墓地の状況などから見ても、鎌倉時代末～南北朝時代ごろに熊野集落が形成されたことが分かっており、寺域や集落の広がりによって「赤岩」が四至として認識されたものである。

ウトノアナは、元禄2年（1689）に原本が描かれたとされる「島原藩領田染組村絵図」の「熊野村」における岩峰上の丸の記号がウトノアナを表している事が分かる。絵図上の表現としては、現在のウトノアナの状況に近いものがあり、現在に至るまで景観は大きく変化していないと思われる。ウトノアナの中に安置される石仏は近世に安置されたと考えられ、聞き取りでは70年くらいの範囲では祭祀などが確認されなかったため、古い時代に配置された石仏がそのまま安置されていると考えられる。

以上の状況から、ウトノアナ・ゼゼノサマについては、史料上に登場する景色を概ね現在まで継承していると考えられる。

☆年表

年号	事柄
建武4年(1337)	六郷山本中末寺次第并四至等注文案（『建武の注文案』）に、今熊野寺の四至として「ゼゼノサマ」を「赤岩」と表す。
元禄2年(1689)	島原藩領田染組熊野村絵図に「ウトノアナ」が描かれる
江戸時代	「ウトノアナ」の岩屋内に石仏・石祠などが整備される。
江戸時代	善神王の祠が「ゼゼノサマ」の付近に安置される。
昭和7年	『田染村志』で、熊野の耶馬も田染耶馬の一部として紹介される。
昭和26年	国東半島県立自然公園に指定される。

第2節 構成要素及び周辺の要素

○ウトノアナ

熊野の坊集落から谷を挟んだ先に見える岩峰群の内、大きな穴が開いた岩峰。「ウト」は「洞」に通じ、「ウトノアナ」は大穴が開いていることから名づけられている。標高は283メートルほどで、高さ約50メートルの岩が屏風状に露出している。県道との高低差は約80メートルになる。

穴の中は、岩石の風食により弱い部分が脱落したものと考えられ、地藏菩薩の石仏や石祠が置かれ、六郷山や修験道の霊場になっていた。

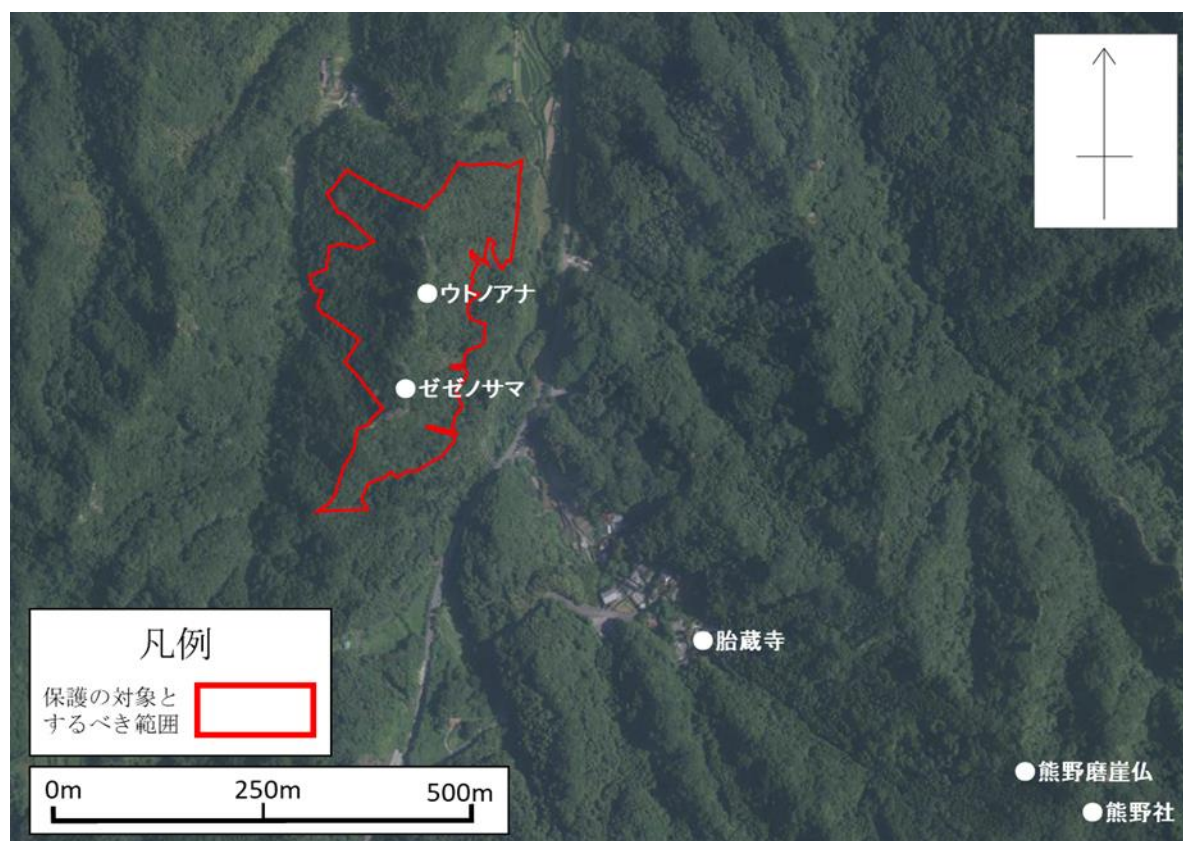
元禄2年(1689)に原本が描かれた『島原藩領田染組村絵図』の熊野村絵図では、西側の岩峰の中に大きな穴が描かれており、ランドマークとなっていたことが分かる。また、大穴が開いているという見た目から、熊野磨崖仏に関する伝承をはじめとする民話や伝承を残してきた。

○ゼゼノサマ

熊野の坊集落から谷を挟んだ先に見える岩峰群の内、岩峰上部に赤い部分がある岩峰。「ゼゼノサマ」は「善神王様(ゼジンノウサマ)」が訛ったものであると考えられる(国東市国見町の赤根社でも善神王のことを「ゼゼノサマ」と呼ぶことがある)。標高は303メートルほどで、高さ約60メートルの岩が立っている。

赤色の部分は、鉄分などの成分が局所的に多いことから発生していると考えられ、国東半島では角礫凝灰岩の地層の中に稀に見ることができる。

☆ウトノアナ・ゼゼノサマの構成要素・周辺要素位置図



☆関連する要素

○熊野の旧坊集落

現在の胎蔵寺の西側には、かつて今熊野寺の坊が集まっている坊集落であった。集落の西側にある鳥居が、坊集落の入口であり、聖域との境界と考えられている。

現在は江戸時代に建築された田の字型の間取りを残す茅葺屋根の建物が5棟残されており、周辺には中世から続く集落の入会墓地が3ヶ所残されている。

○熊野磨崖仏

熊野地区の南東部に位置する平安～鎌倉時代に彫られた磨崖仏（史跡・重要文化財）。

高さ6.8メートルの大日如来像、高さ8メートルの不動明王像を中心とし、安貞2年（1228）の『六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録写』には、大日岩屋・不動岩屋という名前で登場している。その後、建武4年（1337）の『六郷山本中末寺次第并四至等注文案』では、今熊野寺と呼ばれる境内に組み込まれたと考えられ、ゼゼノサマと同じく、東の四至「コケラ仏」として登場している。

○鬼が積んだ石段

磨崖仏の前方にある石段は、鬼が積んだという伝承があり、「鬼が積んだ石段」と呼ばれている。

民話の中では、「ウトノアナ」に住んでいた鬼が、人を食べたいと思った際に、熊野社の権現様に許可を求めたところ、権現様は日の出までに熊野社の前に99段の石段を積むことができれば食べても良いと約束してしまう。鬼はものすごい勢いで石段を積んでいき、日が昇る前に権現様が様子を見ると、最後の1段の石を担いでいた。あわてた権現様は鶏のモノマネをして、朝になったと勘違いした鬼は一目散に逃げていったとされている。

○胎蔵寺

現在の胎蔵寺は、今熊野寺の中心的な坊の1つであったと考えられ、現在の建物は明治時代に建てられ、増築を繰り返したとされる。

寺宝として、南北朝時代の懸仏（大分県指定文化財）3枚があり、大きいものは青銅製で直径53.5センチの正円・鏡状で、阿弥陀三尊の像を鋳出している。元々は熊野社の御正体であったが、明治初年に神仏分離などの影響で、胎蔵寺に移したとされる。

○熊野社

胎蔵寺の境内奥にある神社。かつての境内は熊野集落全体に至っており、熊野集落入口・熊野磨崖仏石段下に鳥居がある。

拝殿、申殿、本殿で構成され、本殿は少し高い位置にあり、岩屋の中に入るように建てられている。

○鳥居

熊野集落の入口には鳥居があり、坊集落の中を通るのが熊野社の正式な参道となっている。

現在の鳥居は昭和9年に松岡専平・萬次郎らが建てたもので、石工の渡辺七郎が請負を行っていることが刻まれている。

第3節 ウトノアナ・ゼゼノサマの価値

田染平野の熊野集落・田野口集落の間に位置する「ウトノアナ・ゼゼノサマ」は、その岩峰の形状によって古くからランドマークとして知られ、中近世の史料にも登場する名勝地である。

国東半島の南西部に盆地状に広がる田染地区の中でも、熊野集落・田野口集落は最南部に位置し、田染盆地から細長く伸びる谷筋に位置する。この範囲の地質は古期宇佐火山岩類の火山砕屑岩に位置しており、長い年月をかけて熊野川や田野口川の侵食を受けて屹立したものである。この地質では、含有される礫の量によって地層の硬さにムラがあるが、水平層理によって比較的軟らかい部分が脱落して穴があいたり、成分の差によって独特な色彩の部分が現れたりする。ウトノアナ・ゼゼノサマがある岩峰の高さは約40～50メートルで、熊野集落からは約90～100メートルほどの高低差がある。約30メートルの高さの部分にウトノアナでは大穴が開いており、約40メートルの高さの部分に局所的に鉄などの成分が溶け出してゼゼノサマの赤い岩の部分が露出している。

ゼゼノサマは、建武4年(1337)に六郷山寺院群の本末関係や四至などをまとめた「六郷山本中末寺次第并四至等注文案」中の今熊野寺(現在の熊野磨崖仏や胎蔵寺周辺の寺院や坊集落)の西側の四至「赤岩」として登場し、当時から赤い色の目立つ岩山としてランドマークになってきたことが分かる。ゼゼノサマの名前の由来は、国東市・赤根社から勧請した善神王(訛ってゼゼノサマと発音する／武内宿禰のこと)の祠が麓にあることからで、祠がある場所の目印となっていることから、「赤岩」はゼゼノサマと呼ばれることになった。

一方のウトノアナは、元禄2年(1689)に原本が制作された「島原藩領田染組村絵図」の内、「熊野村絵図」に描き込まれ、岩峰の中に白丸を使って表現されており、同じくランドマークとして機能してきたことが分かる。ウトノアナは漢字では「洞の穴」と表せ、大穴が名前の由来となっている。また、ウトノアナの内部を見てみると地蔵菩薩の石仏と弘法大師の石像が安置されており、江戸時代前期頃に田染地区に流入した真言宗系の修験道の影響を受けていると思われる。

ウトノアナはその大穴の奇怪さから民話の元となっており、熊野磨崖仏の前にある「鬼が築いた石段」の民話において鬼が棲んでいるとされていたり、賭け事をするならず者が住んでいるという話も伝わっている。

以上のように、ウトノアナ・ゼゼノサマはその特徴からランドマークとして利用されてきた岩山で、寺院や村の境界の目印として、中世・今熊野寺の西の四至となり、近世・熊野村の境界の岩峰として村絵図に描かれてきた。江戸時代には修験者の石仏など設置された霊場となったが、熊野磨崖仏にまつわる鬼の伝承とも関連して、観賞の対象としても著名で重要である。

第3章 ウトノアナ・ゼゼノサマと豊後高田市

第1節 名勝地としてのウトノアナ・ゼゼノサマの意味

豊後高田市は、田染地区の文化財や歴史的景観の保護に古くから取り組んでいる。

古い地誌などによると『田染村志』などにおいては、ウトノアナ・ゼゼノサマを含む岩峰群を田染耶馬の一部（熊野の耶馬）としており、鍋山・間戸ン岩とともに、田染地域における岩峰群の景観美を称えられることとなり、大穴があいたウトノアナについては、鬼が築いた石段に関連する民話でも取り上げられた。

昭和50年代には、大分県立風土記の丘歴史民俗資料館（現、大分県立歴史博物館）により、荘園村落遺跡詳細分布調査が始まり、その最初のフィールドとして豊後国田染荘が選ばれ、かねてより知られてきた仏教遺産（富貴寺大堂や熊野磨崖仏など）だけでなく、荘園村落遺跡として保護するべきという提起がなされた。

平成25～27年度に実施された大分県の名勝に関する特定の調査研究事業にとって、国東半島の岩山景観と六郷山寺院群にまつわる名勝地について検討がなされ、田染地区については平成28～29年度にかけて、文化庁の補助事業として田染耶馬名勝調査事業を実施し、平成30年3月に『国東半島田染名勝調査報告書』を刊行した。同調査では、島原藩領田染組村絵図をベースに、岩山景観と荘園との関係性について調査を行い、ウトノアナ・ゼゼノサマも特定調査地として調査がなされた。

この調査の中で、村絵図に描かれるウトノアナの特徴的な岩山景観と、建武の注文に記載された四至「赤岩」について再検討が行われ、ウトノアナ・ゼゼノサマを古くから人々がランドマークとし、江戸時代以来、信仰物を設置してきた歴史が分かった。また、その後は民話の世界で、熊野磨崖仏などと結びつき、親しまれてきた景色となってきたことが分かった。

ウトノアナ・ゼゼノサマは、景色や民話と関連して、市民にとっても馴染み深く、名勝地として保全することで、ウトノアナ・ゼゼノサマをより良く保存活用していきたい。

第2節 保存活用について

今回「ウトノアナ・ゼゼノサマ」として保護すべき範囲の地目は山林であり、主に2つの岩峰から構成される。信仰物も所在しているが、現在では仏神事はなされておらず、現地を訪れている住民もいない。

急峻な岩峰上においては、現状では新たな開発行為が行われる状況ではない。所有者が日常の管理をしており、竹やぶの伐採などが定期的に行われている。ウトノアナ・ゼゼノサマは、岩峰群からなる名勝地であるので、周囲の災害対策（事故防止や防災）などの計画と連動し、保存を行っていく必要がある。

活用については、熊野磨崖仏や地域の民話と関連付けて活用する他、国東半島峯道ロングトレイルではオプションのコースとして、周辺の旧道を散策するコースの際に解説に含まれていることがある（保護すべき範囲には立ち入らない状況ではある）。

また、ウトノアナ・ゼゼノサマと熊野集落の間の耕作放棄地において、櫨を植える取組が実施されている（元々田染地区において、櫨から採取・加工した木蠟の製造が盛んであったとされ、民謡《櫨採り歌》

の復興を行ったり、景観を維持し紅葉を楽しむことを目的としており、農都交流の文脈で推進されているもの)。地域内で行われている様々な取組と連動したウトノアナ・ゼゼノサマの継承・普及に関する取組を継続していくことを目指していく。

令和4年に登録記念物（名勝地関係）に登録された「鍋山（南屏峽）」、令和6年に同登録を受けた「朝日岩屋」「夕日岩屋」、令和7年に同登録を受けた「穴井戸観音」や、田染耶馬名勝調査の他の特定調査地、その他の史跡・重要文化的景観との連携をしながら、保存活用に努めていきたい。

以下に、ウトノアナ・ゼゼノサマの保存活用における課題を整理しておく。

- | | |
|------------|--------------------------------------------|
| ①視点場の検討 | 鳥居前や熊野社会館など視点場からの視点を確保
観光等における視点場の設定 |
| ②周知広報・普及啓発 | 出前講座など市民向けの見学イベント
動画等を用いたウトノアナ・ゼゼノサマの紹介 |

○参考文献・資料

- 大分県企画振興部景観自然室編『国東半島県立自然公園環境学術調査報告書』（2009年）
大分県立風土記の丘歴史民俗資料館『豊後国田染荘の調査』（1986年）
田染村志編集委員会『田染村志』（1932年）
文化庁文化財部記念物課『名勝に関する特定の調査研究事業報告書（大分県の名勝に関する特定の調査研究事業）』（2016年）
豊後高田市教育委員会『六郷満山寺院群詳細調査事業報告書』（2016年）
豊後高田市教育委員会『重要文化的景観 田染荘小崎の農村景観 保存計画』（2016年）
豊後高田市教育委員会『国東半島田染名勝調査報告書』（2019年）
豊後高田市教育委員会『鍋山（南屏峽）名勝調査報告書』（2021年）
豊後高田市教育委員会『夕日岩屋・朝日岩屋名勝調査報告書』（2023年）
豊後高田市教育委員会『穴井戸観音名勝調査報告書』（2024年）
豊後高田市『豊後高田市史』（1998年）
西国東郡編『西国東郡誌』（1923年）

○参考史料

- 『島原藩領田染組村絵図（熊野村絵図）』（1836年／1689年原本、豊後高田市所有）
『六郷山諸勤行并諸堂役祭等目録写』（1228年、長安寺文書）
『六郷山本中末寺次第并四至等注文案』（1337年、長安寺文書）
『豊前豊後六郷山百八十三所霊場記』（1755年、霊仙寺所蔵）

ウトノアナ・ゼゼノサマ
名勝調査報告書 資料編

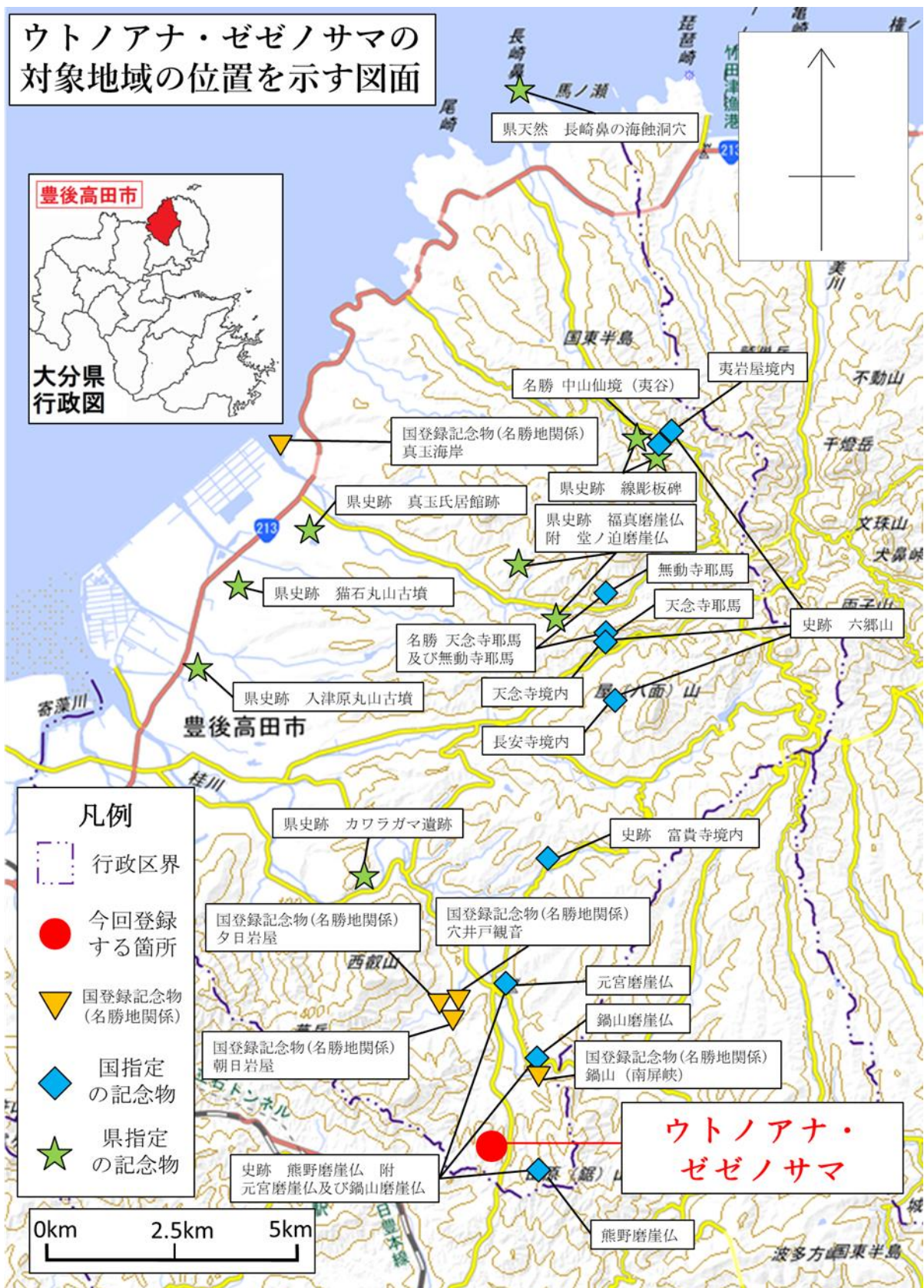


図1：ウトノアナ・ゼゼノサマの対象地域の位置を示す図面



図 2：田染地区大字図



図3：田染地区村境概要図（江戸時代）

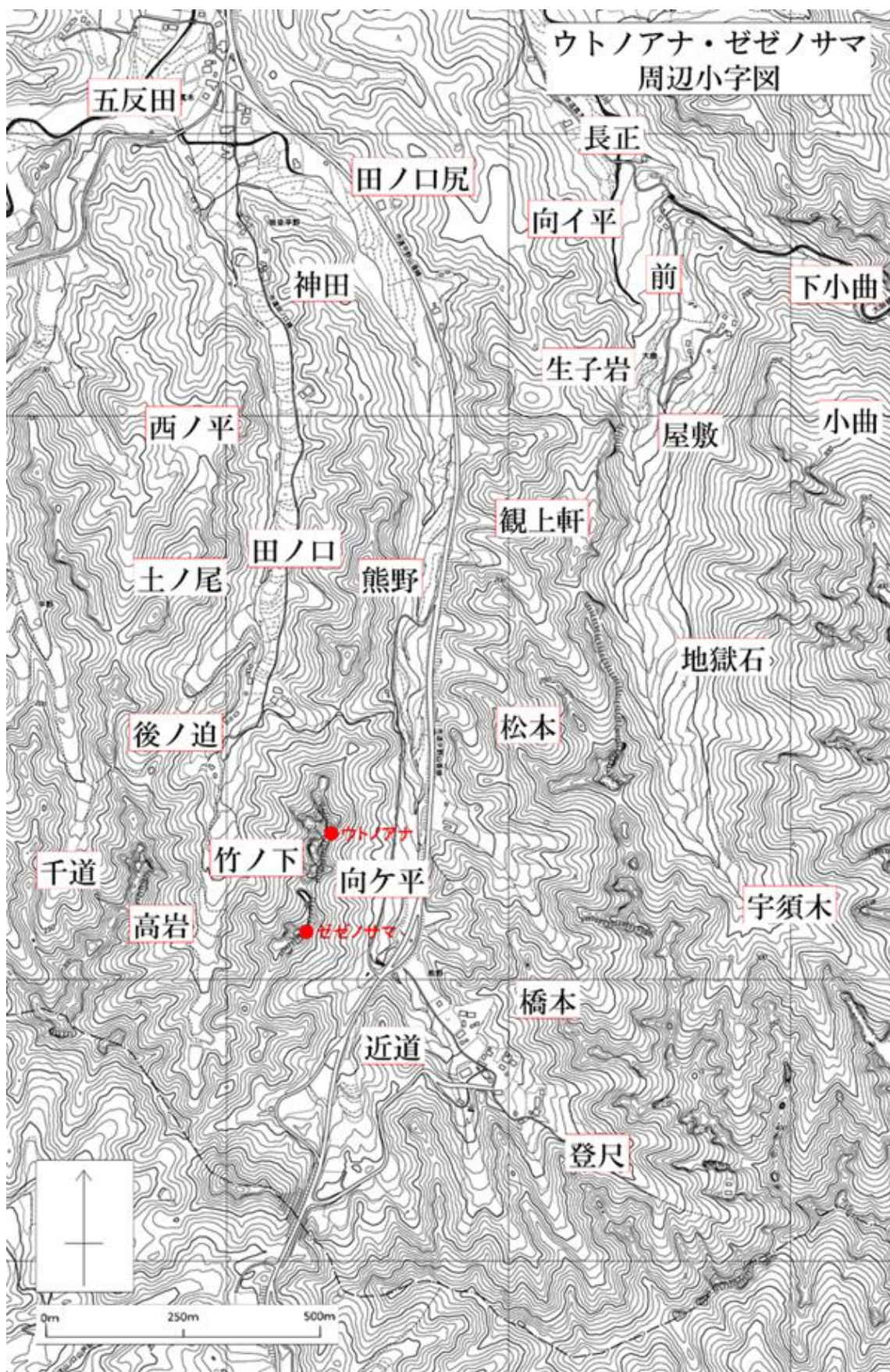


図4：ウトノアナ・ゼゼノサマ 周辺小字図

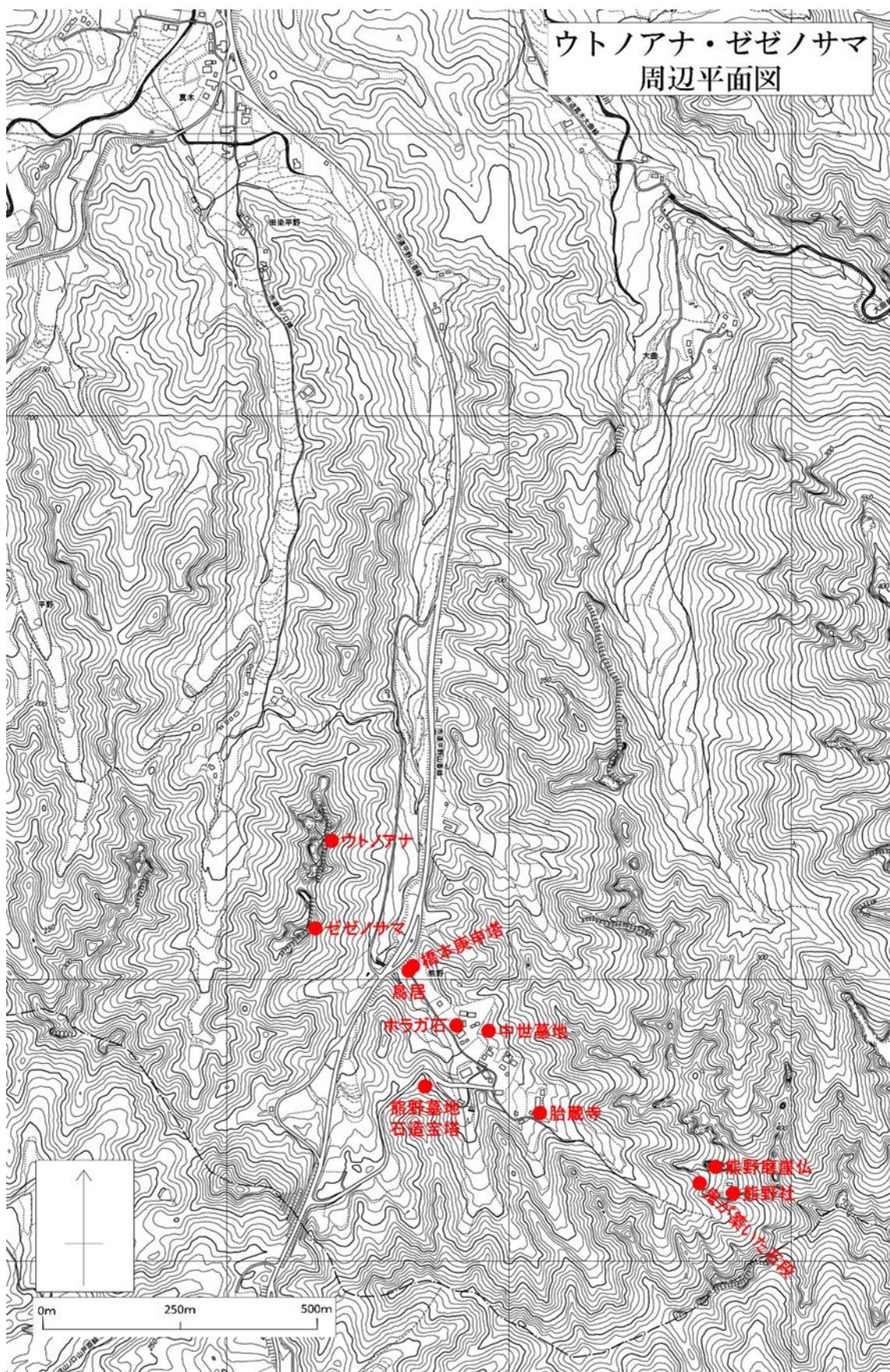


図5：ウトノアナ・ゼゼノサマ 周辺の要素の位置図

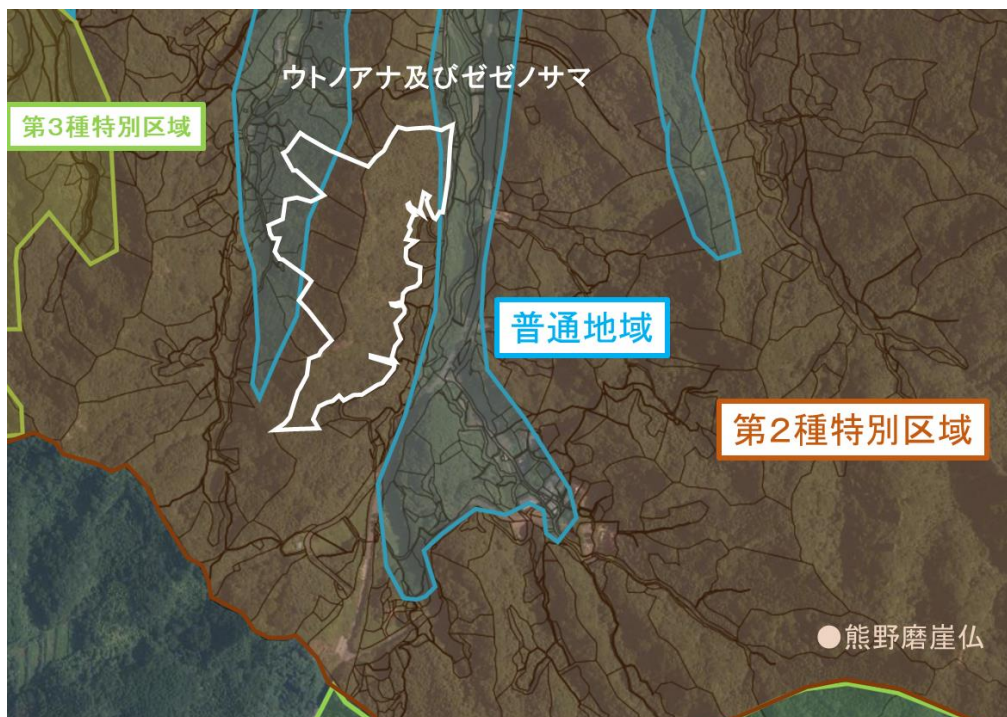
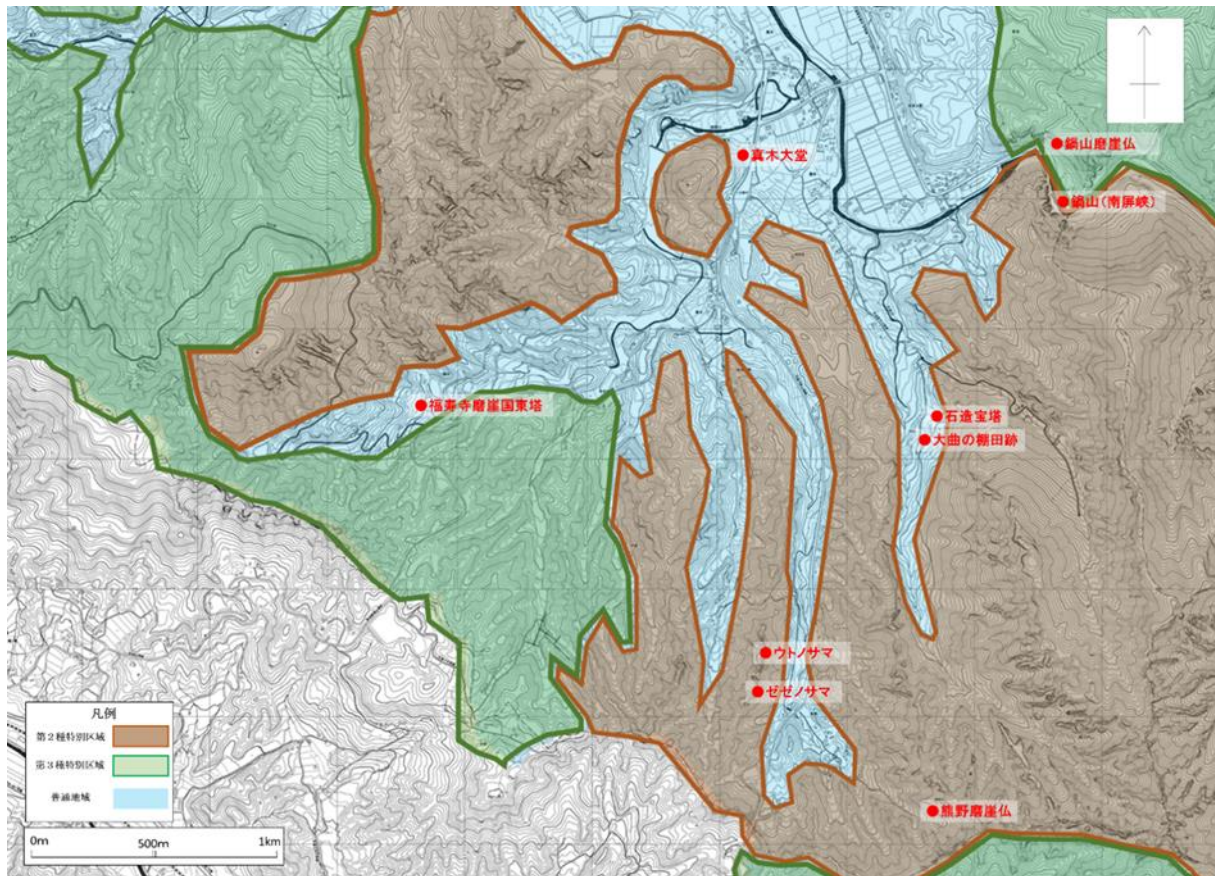


図6：国東半島県立自然公園の規制の範囲

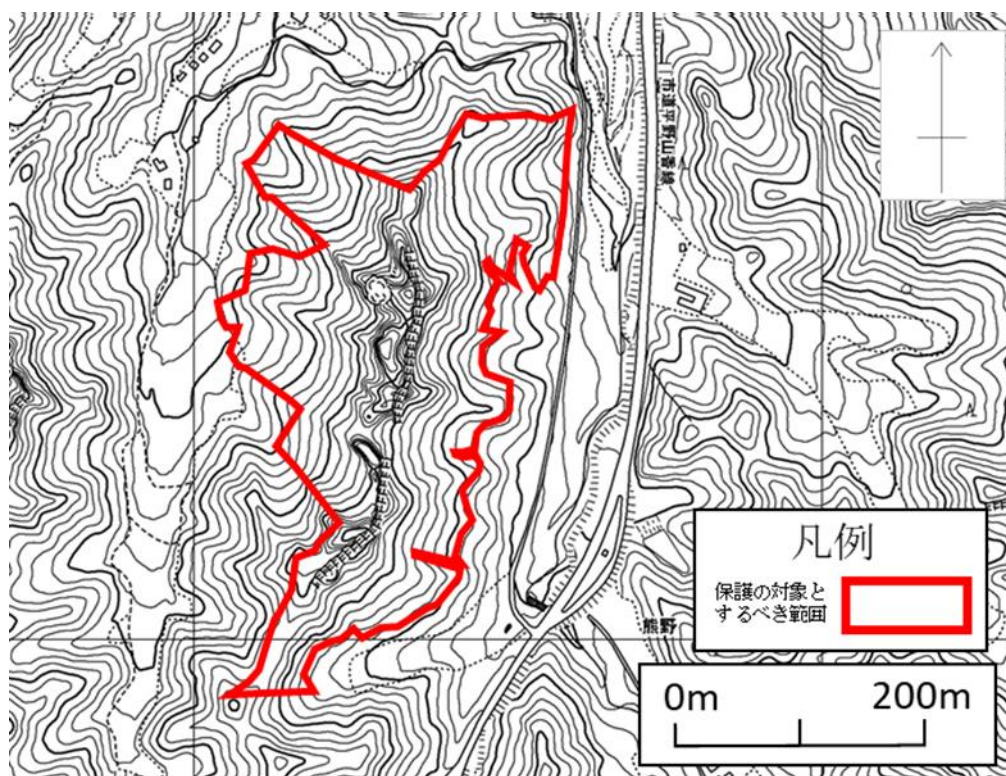


図7：ウトノアナ・ゼゼノサマ 範囲図（地形図）

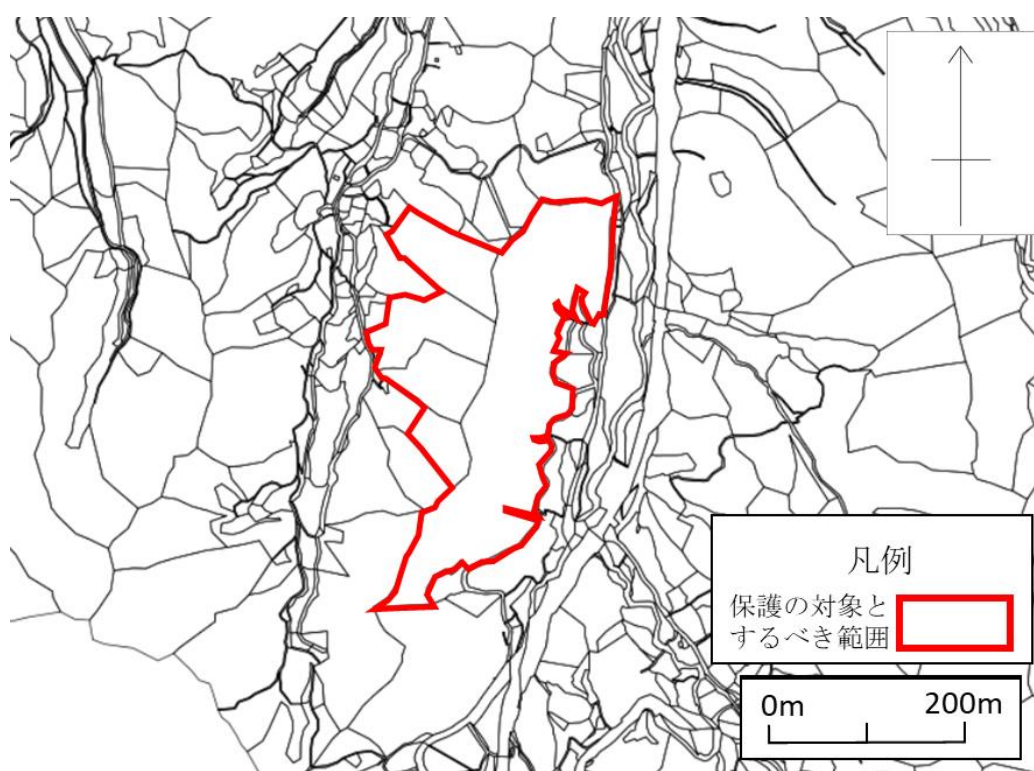


図8：ウトノアナ・ゼゼノサマ 範囲図（公図）

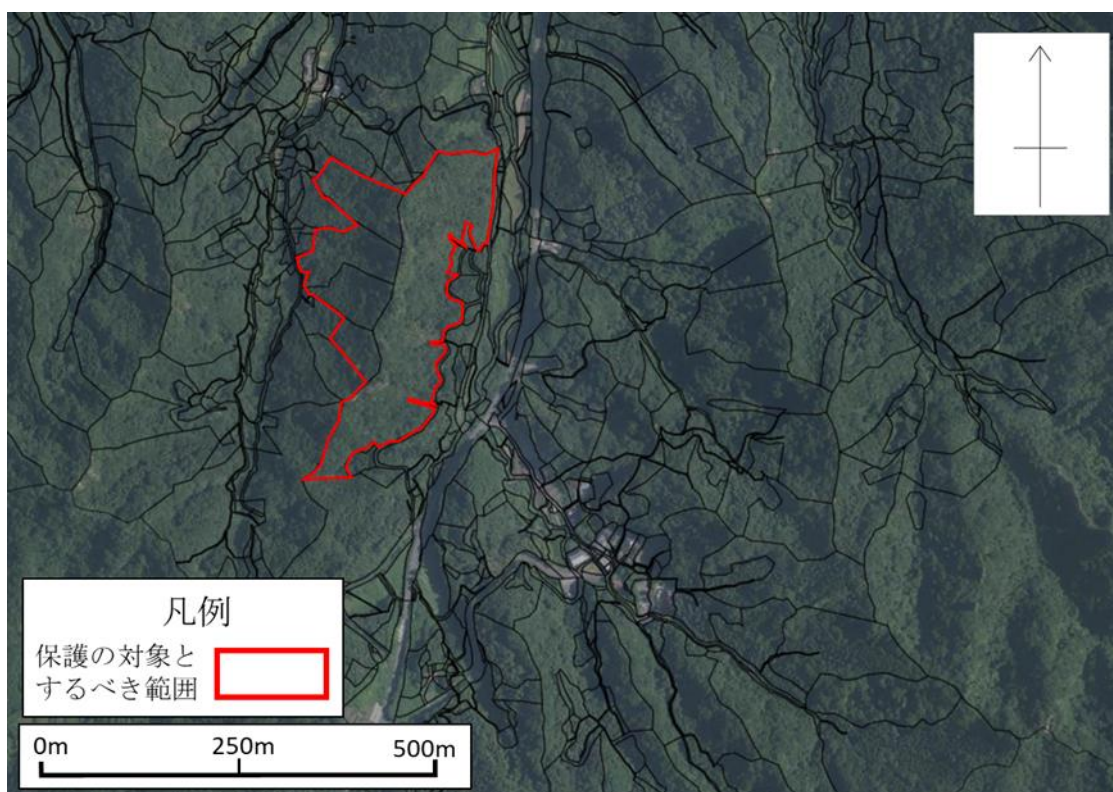


図9：ウトノアナ・ゼゼノサマ 範囲図（航空写真）



図 10：島原藩領田染組村絵図（熊野村） ※上が北

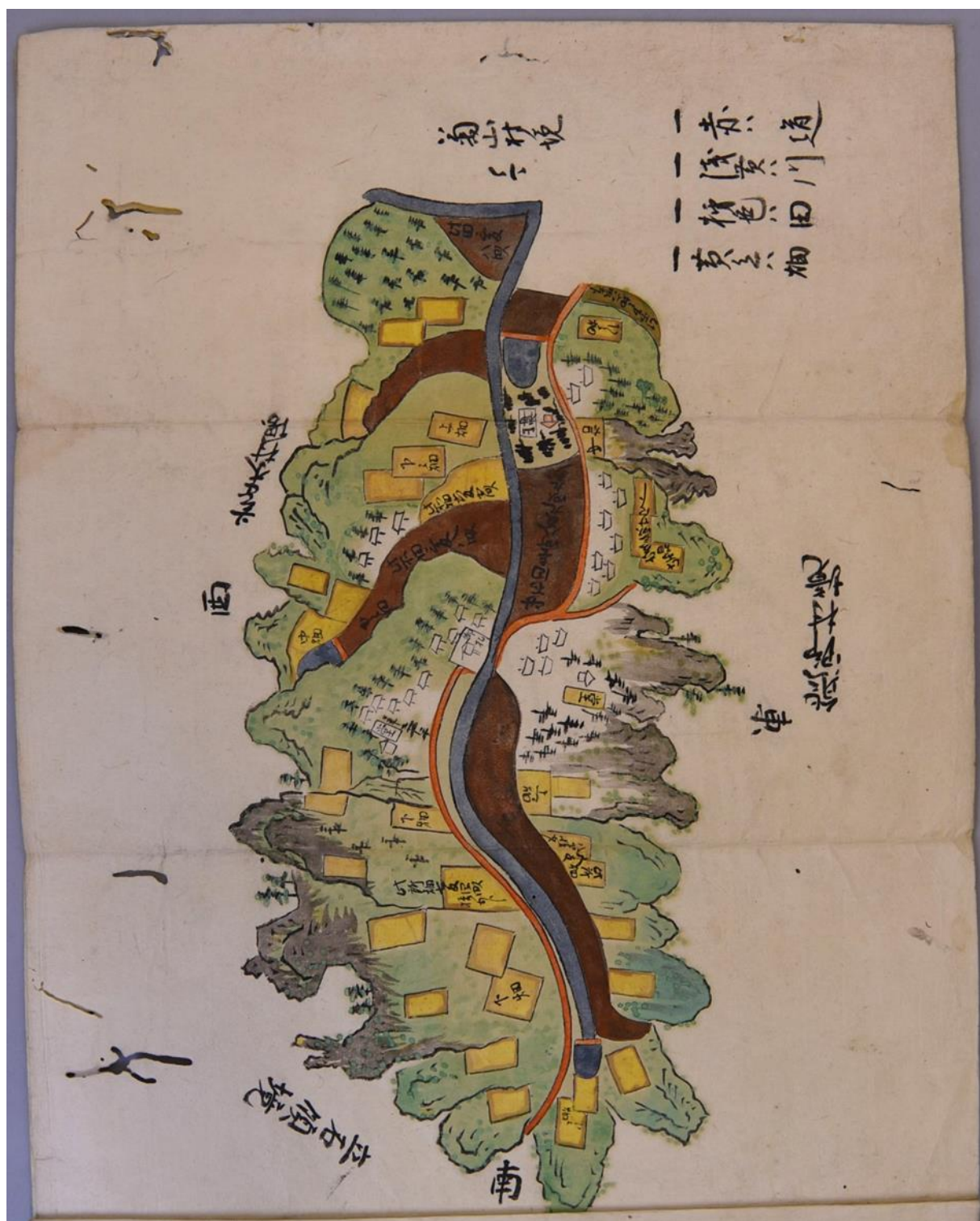


図 11：島原藩領田染組村絵図（田野口村） ※上が北

【ウトノアナ・ゼゼノサマに関する文献等】

■「六郷山本中末寺次第并四至等注文案」(『永弘文書』) 建武4年(1337)

(『豊後国荘園公領史料集成2 来縄郷』より)

六郷山本中末寺次第并末寺四至以下記之、

本山付末寺

一、後山 吉水山 大折山 鞍懸山 津波戸山 高山 馬城山

(中略)

本山末寺

辻小野山 大谷寺 間戸寺 伊多伊 大日岩屋 中津尾岩屋 轆轤岩屋 良醫岩屋 朝日岩屋

夕日岩屋 聞山岩屋 今熊野岩屋 稻積岩屋 日野岩屋 鳥目岩屋 河邊岩屋 鼻津岩屋

普賢岩屋 如覚寺 来迎寺 光明寺

一、口瀧寺〈限東迫 限西マイ淵／限南サクラノ尾立 北山下美尾〉

(中略)

一、今熊野寺〈限〔東脱〕コケラ佛 限西赤岩／限南尾〔美尾カ〕立 〔限脱〕北稻積不動堂〉

委院主相傳證文仁明白也、

一、良醫岩屋 朝日岩屋 夕日岩屋 聞山岩屋 稻積岩屋 日野岩屋 鳥目岩屋〈馬城山末寺也〉、

彼寺領多分〈曾根崎十郎入道押領〉、寺領四至堺、本寺院主所持証文仁分明也、

(後略)

■『田染村志』(昭和7年)

(第十四章 名所旧跡 第二節 田染耶馬より)

天斧鬼鑿、荒の世、一夜揮ひて、田染闔郷の奇嶽怪石を削刻し来る。所謂田染耶馬なり。而して其の趣態は寧ろ豊前の本耶馬に勝る。科学的に謂えば、火成岩に対する風化水蝕作用なり。勝域汎きに弥る。大別して、熊野耶馬、鍋山耶馬、間戸耶馬の三となすを得べし。

熊野耶馬 鋸山〈田原山〉より、一脈の剣峰西に伸ぶもの、即ち熊野耶馬なり。筈起群立せる怪奇の峰、亦立石より望むを得。称して五ノ岩と曰ふ。更に伸びて熊野山に及び、到る所熊野社一帯の奇勝となる。仁聞作と伝ふる熊野社畔の大磨崖仏は、天塹と相須つて、其の靈腕を千古に艶称せらる。斯のみを賞観するも亦眼を刮するに足る。況んや全豹をや。探勝の客は直ちに日豊線立石駅若は中山香駅より到るを得べし。道途稍陰なるも、所在の勝景は流汗の労を償うて余あり。

鍋山耶馬 田染村より田原村杳掛に到る縣道に沿ふ。村社三宮八幡社畔の谿谷、即ち鍋山耶馬なり。田染川の南岸、数十丈の懸崖壁立して、葛蘿之に纏ひ、崖頭往々老松が舞ふが如きを観る。水は清冽に山は高く、仲秋霜花一たび飛べば、満崖の葛蘿凡て紅化して、一幅の丹青を現じ来る。春には流鶯あり、初夏には河鹿の銀鈴を揮ふあり。坐ろに行客をして低回去るに忍びざらしむ。

間戸耶馬 烏帽子嶽の余脈伸びて、陽平を経、下村の平地に突出するもの即ち間戸耶馬なり。此処にも風化水蝕作用最も巧妙に行はれ、所在洞窟多し。就中朝日岩屋、夕日岩屋、穴井戸等最も現はる。俗諺戯謔して曰く田染には十八間の窓〈間戸、窓國〉ありと、亦佳謔とすべし。背面小崎道路より觀るに孤松を戴ける岩石の趣態凡ならず。寧ろ深耶馬の勝に軼ぐるを覚ゆ。此の一帯凡て佛蹟の集團地なり。

【現況写真】



写真1：ウトノアナ・ゼゼノサマ遠景



写真2：ウトノアナ・ゼゼノサマ 遠景

【現況写真】



写真3：ウトノアナ・ゼゼノサマ遠景（熊野社会館より）



写真4：ウトノアナ・ゼゼノサマ遠景（ドローン写真）

【現況写真】



写真5：ウトノアナ・ゼゼノサマ（ドローン写真）

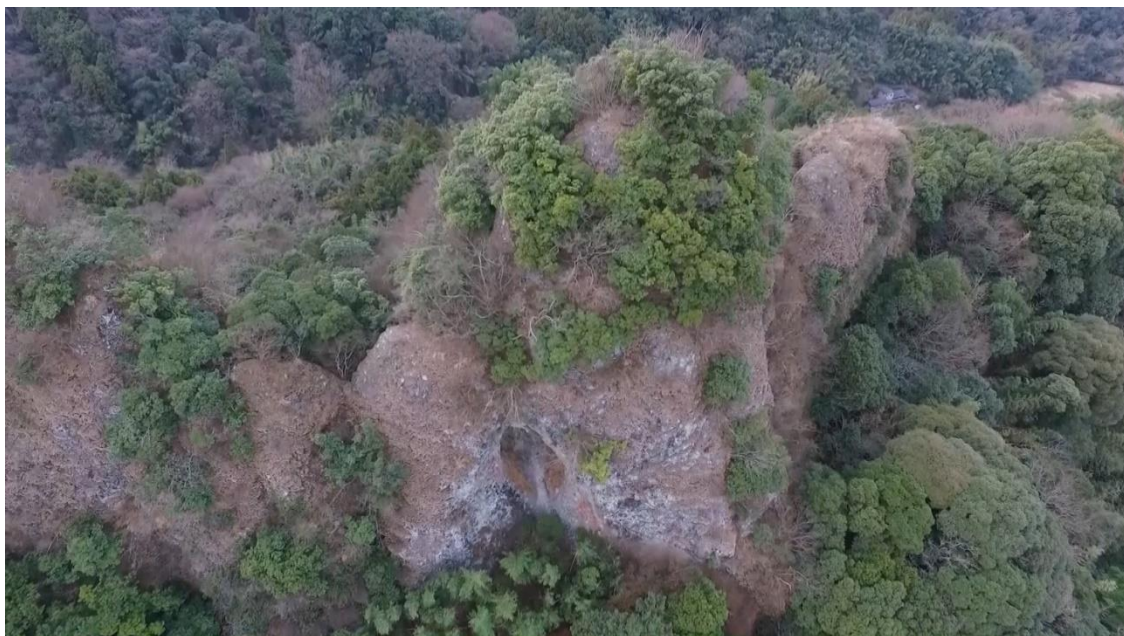


写真6：ウトノアナ（ドローン写真）

【現況写真】

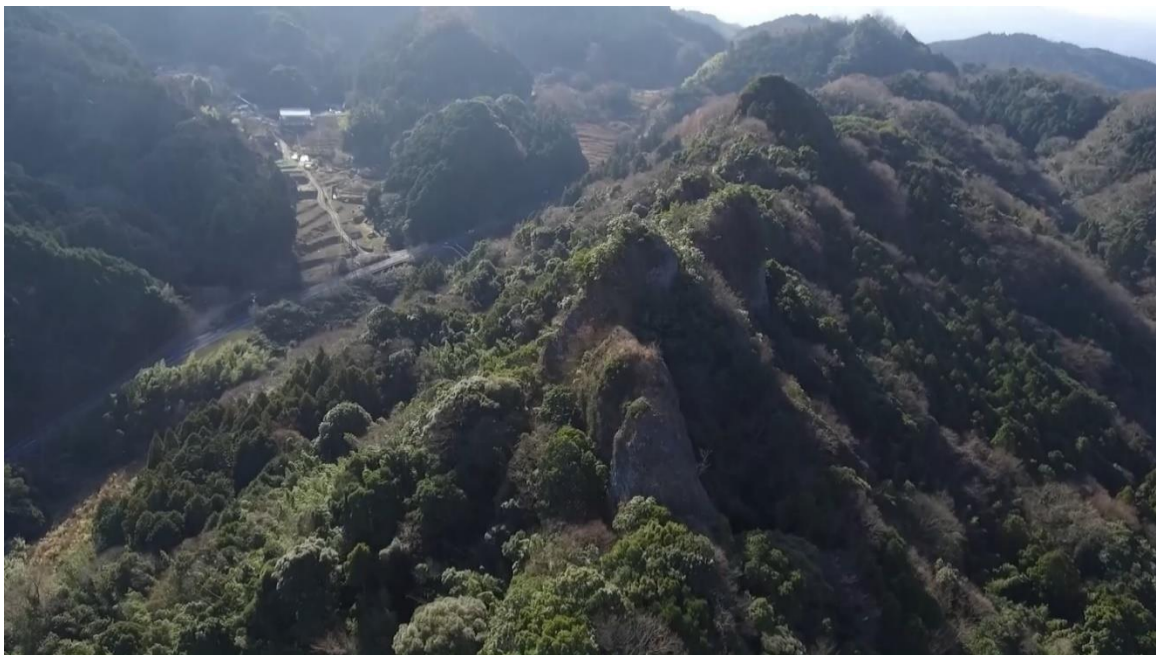


写真7：ウトノアナ・ゼゼノサマを北側から（ドローン写真）



写真8：ウトノアナ内部（ドローン写真）
（左側：石仏／右側：石祠と中に安置される石仏）

【古写真】

写真 9：田染耶馬

（朝日新聞西部本社『六郷満山 ほとけの里くにさき』（凸版印刷、昭和 53 年）より）

※転載不可

【参考：登録区域外】

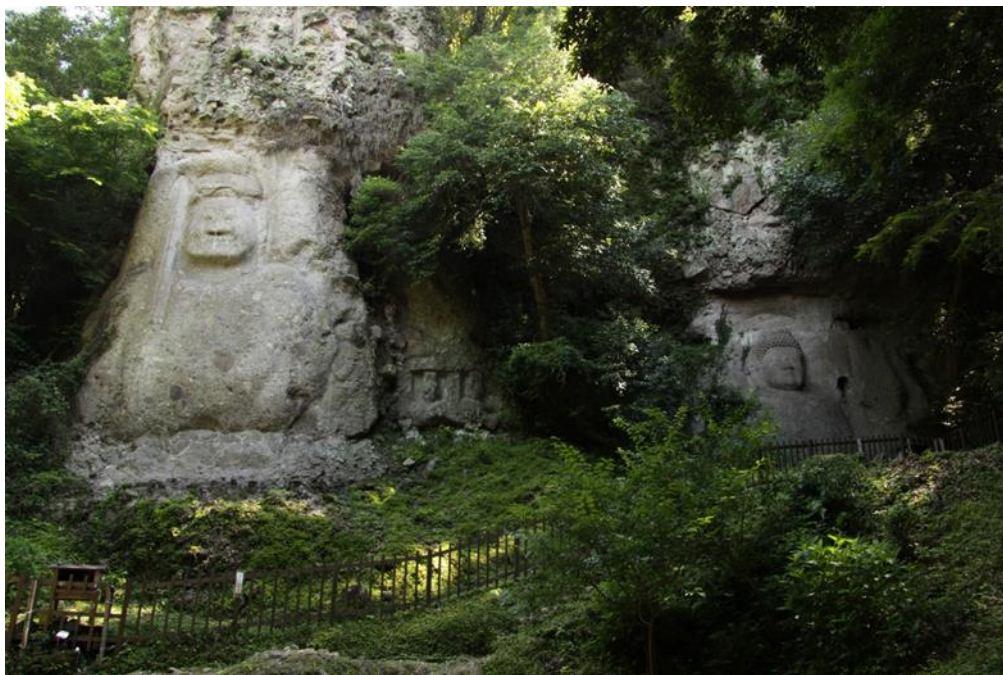


写真 10：熊野磨崖仏

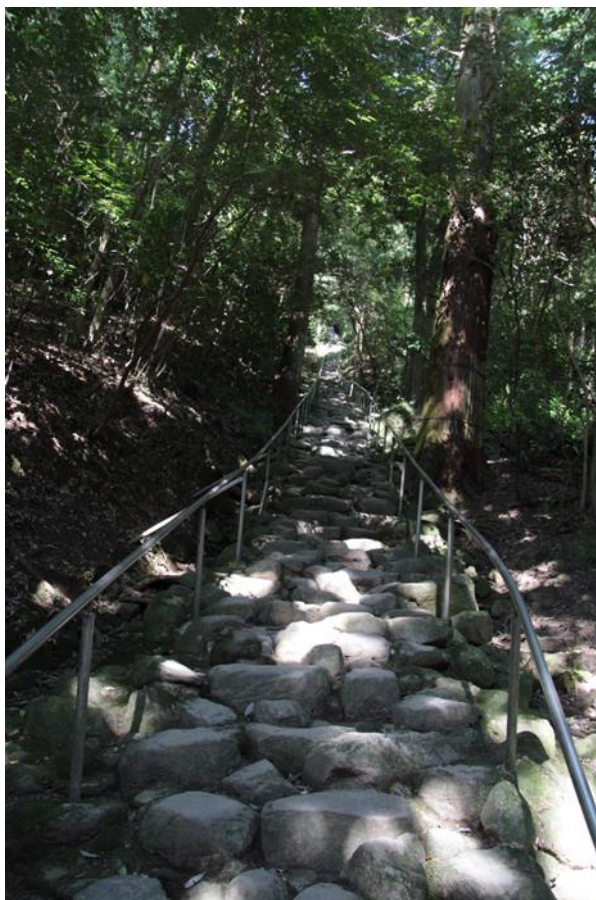


写真 11：鬼が築いた石段

【参考：登録地区外】



写真 12：熊野社



写真 13：胎蔵寺

【参考：登録地区外】



写真 14：橋本庚申塔



写真 15：ホラガ石

ウトノアナ・ゼゼノサマ
名勝調査報告書

発行日：令和 7 年 8 月 1 9 日

発行者：豊後高田市教育委員会

〒872-1101

大分県豊後高田市中真玉 2144-12

TEL:0978-53-5112

